

「学生と共に学ぶ素材研究から」



倉敷市立短期大学保育学科／専攻科保育臨床専攻
教授 金山和彦

遠隔授業において、触覚遮断の時間が続いております。この状況において、視覚的思考とこれまで蓄積してきたイメージの組み換え遊びにより、授業を続けてきました。

例えば、なぐり描きをした画用紙を切り刻み、再構成してイメージを創出したり、「具体美術協会」吉原治良のような《大きな円》を新聞紙見開きから切り出し、内包する記憶やイメージ、作者のパーソナリティを学生同士で画面共有するなど、ものづくり屋にとっては、これまでの授業を再考する大切な時間となりました。

保育・教育系の学生が大好きな造形授業のオートマティズム技法遊びについて、昨年度、短大専攻科(3~4年生)学生と、少し詳しく検討しました。あくまで、学生の目線においてです。今回は、その活動の様子をお話ししましょう。

こどもとアートの結びつきを話すのに、ついつい、ポロック(Jackson Pollock 1912-1956)やアール・ブリュット(Art Brut)の作家らの話になります。2年生の前期授業では、ローラー絵具でマドラスチェック状の模様を作った上にポロック風のアクションペインティングを一人ずつ「かっこよく」皆に見せるパフォーマンスをしました(図1)。学生は、ドリッピングだけではなく、スナッピング、ポーリング、ステイニングなど、自分なりの表現のバリエーションを駆使していました(図2・3)。さぞ、おもしろかったのでしょう。大興奮の様子がみてとれました。



図1 学生作品



図2 学生の活動の様子

この授業を体験した学生から、絵具の組成研究をしたいという申し出があり、ゼミやオフィスアワーの時間を見て、取り組んできました。絵具を掌で感じたことから、絵具材料がどのような成分で構成されてい

るのかを知りたいとのことでした。このことは、幼児の造形活動における安全性を確保するとともに、発色や定着力、支持体（紙やキャンバス）との相性を理解することにつながるものです。

我々が使用する主な絵の具としては、幼児、児童向けのマット水彩絵の具や安全基準を満たしたポスターカラーがあります。成分としては、主に顔料（色粉）、メディウム（定着糊）、防腐剤等であり、重金属などを含まないことから、安全な画材であることは周知のことです。画材メーカーの公表によると、メディウムの役割として、アラビアゴム、デキストリン、グリセリンが成分として含まれるようです。その中のアラビアゴムは、マメ科に属するアカシアの樹木からとった半透明の樹脂で接着剤の役割をします。そして、ポテトチップス（主に筒箱入りのもの）や粉末飲料にもみられるデキストリンは、でんぷんの分解質で接着効果をさらに高める役割をします。グリセリンは脂肪・油脂による湿潤剤の役割をするものです。これだけの成分から構成されていることを私もあらためて知りました。

そのような成分で製作された画材メーカーの「フィンガー・ペインティング用絵具」の製品3種類について調べてみました。例えば、製品Aは、成分として顔料、水、樹脂（ポリビニルアルコール）、防腐剤、苦味剤で構成され、安全面に関して優れているようです。幼児が誤って絵の具を口に入れてしまう可能性が高いため、絵の具を飲み込まないよう苦味剤が含まれていることが大きな特徴であることも知りました。（保育者研修においても、苦味剤の話は伝えますが、「舐めてみましょう」とは未だ言ったことがありません。・・・アクリルを舐める人がいたら大変です！）次に製品Bは公表されている範囲で、顔料、水のりが含まれています。製品Cには、顔料、体質顔料、水溶性糊量、安定剤、水が含まれます。これらの代表的な3つの製品は、もちろん安全基準を満たしており、保育実践現場において幼児に使用する際には最適であることを確認しました。

次に本研究室では、お決まりの約束「身近な素材で絵具を製作！」をしてみることにしました。つまり、自作絵具の提案です。市販で販売されている絵の具は安全性に優れていますが、保育活動で絵の具を使用する際、経費コストが高くつくという問題が発生します。この時に、絵具の成分を知っておくことで、身近でかつ安価な材料を代用して市販の指絵の具と同質の絵の具を作ることができることを皆で考えました。例えば粉絵具（顔料）、水、洗濯のり（PVA）を混ぜ合わせることで市販の指絵の具に代用できる絵の具を作り出すことが可能となるのです。

ここで学生と話し合ったこととしては、各素材どのくらいの分量で混ぜ合わせると絵具遊びに適した絵の具が作成できるのかということでした。そうなれば早速試作です。

今回の試作では、洗濯のり 300ml を基準とし、それに対し顔料の量を変えて、それぞれ混ぜ合わせたものを4パターン作りしました。図4は左から洗濯のり 300ml に対し粉絵具を 2g を混ぜたもの、5g を混ぜたもの、8g 混ぜたもの、10g を混ぜたものです。これらを発色する色の濃さに着目して比較対照してみました。この他、水分量も変更してみました。（図4・5）



図3 学生の製作過程（部分）

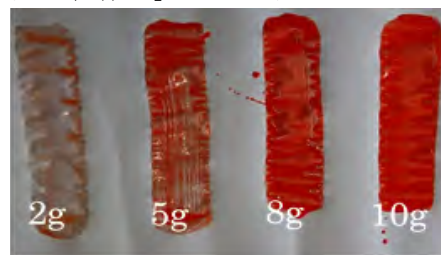


図4 顔料の分量を調整し、比較したもの

最終的に洗濯のり 300ml に対し、顔料 10g、水 50ml を混ぜ合わせて作った絵具が色の発色もよく、適度に抵抗性のある粘度（ポーリングの糸を長く引くことができる）に感じられたことから、活動を行うために適したレシピの一視点を導き出しました。価格も既製品：200ml・1000 円のものが、手作りをした場合、同容量で 60 円という計算になりました。驚きです。

この研究に取り組んだ図工研究室の学生は、「技法遊び」に関する保育者へのアンケートも行い、大半の保育者が「技法遊び」を感情の発散のためと考え、芸術性や形象の面白さについての回答がみられなかったことを導き出しています。

表現過程の行為が美につながる理解、保育者にこの面白さが分かれば、こどもの何気ない行為をアートとして引き出す環境構成の準備も意欲的にできるのでしょうか。そもそも、戦後の前衛美術団体の一つ、具体美術協会は真っ新の形象を追いかけた結果、児童美術からヒントを得ることにいち早く気づいたものでした。彼らは、児童美術の展覧会に出かけていき、スケッチ、模写をしながら会場を歩き回ったともいわれています。前衛美術と児童美術は円環でつながっているのか。また、学生と探求をしたいと思います。

(写真掲載に関しては本人の同意を得ています)

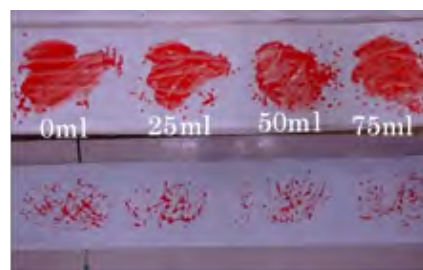


図5 水の分量を調整し、比較したもの